

うごこみやま。



なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学教授)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



今月のテーマ トウスニンケ(エゾリス)

キモ?
カワ?



どっち
でしよう。

イラスト/安田千夏

北海道を代表する小動物、エゾリス。年輩の方はキネズミって呼んだりしますね(ちなみにシマリリスはシマネズミ…笑)。「エゾリスカレンダー」も作られたりして、不動の「愛されキャラ」だよな。

でも、アイヌ文化でのイメージはかなり違うみたい。アイヌ語名にある「トウス」というのは、アイヌ社会に伝わってきた呪術、占い、託宣のこと、トウスニンケは、トウスで自分の姿を消すとか、相手のトウスを消すという意味だと言われるの。なにしろ強い霊力をもった存在で、しかもあまり良いものじゃないと考えられてたみたい。

私が二風谷で暮らしていたある日、恩師の萱野茂先生が家に入ってくるなり「ああ気色悪い。森の中で急に気持ちが悪いわザワザワした。なにかに見られているぞと思って、あちこち見渡したらキネズミの野郎、木の枝からこっちを睨んでるんだわ。睨み返してやったら何事もなかったけど」っておっしゃったの。この、見られっぱなしは絶対にダメで、必ずその主を捜して睨み返さないとけないということ、アイヌ文化ではよく言われることです。それにしても、なにかに見られているという気配を感じるとのこと自体、なんとも不思議な力だと思つのに、その萱野先生をあそこまで気味悪がらせるトウスニンケ…やっぱりただものではないね笑。



エゾリスは木の上において拜んでいる姿がいかに貧乏くさいとか、狩人が出がけに見かけたら不猫となる、というように縁起の悪い不吉なものとしてウエンペ(悪いもの)とも呼ばれるよね。でも一方で、熊狩り名人の猟の守り神が白いエゾリスであった、という話も。

この善くも悪くも言われるエゾリスの起りには、カムイ(神)の草履(わらじ)だったという話。カムイの履いていた草履が破れたので捨てたが、カムイが使ったものを腐らすのはもったいないといって生物にしたのがこのリスなんだって。リスの体が細長いのは元が草履だったからなんだと。

昨年の日本マンガ大賞を受賞した、アイヌの少女、アシリパがヒロインとして登場する『ゴールデンカムイ』の第一巻に、エゾリスの仕掛罠、解体や調理法などが結構リアルに取り上げられているの。紹介されている料理は骨ごと細かく切り刻んだチタタフ。生で食べるのが伝統的なのですが、主人公である杉元のためにチタタフを団子に入れたオハウ(汁も)で、美味しそうに食べる様子が描かれているの。七世代のエカシ(お爺さん)にそのマンガの話をしたところ「うちの孫婆さんはリスをチタタフにして食ったって言うてたな」。

どんな味が想像も出来ないけど、優子さん、一度食べてみたいですよな。

